

# 芥川龍之介の翻案に見る受容化の方策

永田 小絵

## Akutagawa Ryunosuke's Domestication Strategy in his Adapted Novels

NAGATA Sae

### 【摘要】

這篇論文要討論“芥川龍之介在改編小說中的歸化策略”。芥川龍之介之作品多為中國傳奇小說的改編，我們能在他的改編小說中窺視日本人心目中的中國形象，透過這些作品分析芥川龍之介的歸化策略。

### 1. はじめに

日本では古代から中国文化に親しんできた。古事記や日本書紀には百濟から和邇（王仁）が渡来して『論語』と『千字文』を献上したとの記述がみられ、平安時代には貴族の間で『白氏文集』が流行した。その後も漢学の伝統は脈々と受け継がれ、訓読法の発明を契機として「漢文脈」という独特の文体を形成することにもなった。江戸時代になると、中国から輸入された多くの漢籍が我が国で復刻され、和刻本<sup>1</sup>・訓詁版<sup>2</sup>として出版されただけでなく、明清代の様々な小説が日本にもたらされた。明朝末期から清朝にかけて中国の民間で流行した白話小説<sup>3</sup>は江戸時代の日本で（訓読書き下し文ではなく）読みやすい和文に翻訳されて幅広い読者を得たばかりでなく、日本文学に大きな影響を与えて多くの翻案も生まれた。西欧文明を積極的に導入し始めた明治維新以降も漢学の伝統は消えることなく、夏目漱石・森鷗外・芥川龍之介らの漢籍に対する教養の深さはよく知られている。現代でも翻訳・翻案および改作や創作に

---

1 日本で版木を彫って出版された漢籍、多くは訓点を付す。

2 訓点を付した和刻本に注釈、考訂等を加えたもの。

3 中国、宋代に庶民の間に興った、俗語による小説。娯楽的要素と勸善懲惡的要素とを兼ねたものとして発達した。「京本通俗小説」「拍案驚奇」などの話本がこれにあたる。平話。－『大辞林』第三版

至るまで、中国の古典に題材をとった所謂「中国物」<sup>4</sup>が日本文学の重要なジャンルとなっており、漫画<sup>5</sup>・アニメ映画<sup>6</sup>・映画<sup>7</sup>・人形劇<sup>8</sup>・テレビドラマ<sup>9</sup>・ゲーム<sup>10</sup>・演芸<sup>11</sup>にまで幅広く翻案・再創作が行われ、中国的なイメージが効果的に用いられている。このように「中国的なもの」(中国表象)は常に我々のそばにあり、日本人の心の原風景ともなっているのである。このような「異国から伝来したものでありながら日本文化の土台となった中国表象」、言ってみれば我々の「こころの中国」を形成するコンテンツにはどのようなものがあるだろうか。翻案は翻訳よりも受容化 (domestication)<sup>12</sup>の方策を取ると考えられているが、中国表象を効果的に用いて読む者に「異国情緒」を感じさせる翻案も一種の「自国中心主義的翻訳」であり「重ね書きの翻訳」<sup>13</sup>であると捉えることができよう。

本論は芥川龍之介の翻案作品を中心に我々の「こころの中国」の在り処を探っていくとするものである。

## 2. 先行研究

### ・芥川龍之介と中国の関わりについて

中国では芥川の人と作品に関する研究は非常に盛んに行われている。中国のインターネットサイト「全国図書館参考諮訊連盟」で検索すると、芥川龍之介

- 
- 4 吉川英治『三国志』『水滸伝』、陳舜臣『小説十八史略』他多数、宮城谷昌光『重耳』『孟嘗君』他多数、北方謙三『三国志』『水滸伝』『楊家将』他多数など。
  - 5 横山光輝『水滸伝』・『三国志』、酒見健一の『墨攻』など。また登場人物として石ノ森章太郎『サイボーグ009』の張々湖 (ちゃん ちゃんこ)、鳥山明『ドラゴンボール』の道士「亀仙人」や孫悟空・悟飯など。
  - 6 藪下泰司監督『白蛇伝』、藪下泰司監督・手塚治虫監督『西遊記』など (東映動画)
  - 7 溝口健二監督『楊貴妃』、佐藤純彌監督『敦煌』、熊井啓監督『天平の薨』など。
  - 8 川本喜八郎 (人形制作) 小川英・田波靖男 (脚本)『人形劇 三国志』NHK
  - 9 『西遊記』(1978年10月1日～1979年4月1日、堺正章・夏目雅子、日本テレビ開局25周年記念ドラマ)、『西遊記』(2006年1月～3月、香取慎吾・深津絵里、フジテレビ)
  - 10 ソーシャルカードバトルゲーム『激戦! 三国演義～英雄合戦～』、『真・三國無双シリーズ』1～8 (コーエーテクモゲームス2000～2018)、『水滸伝・天命の誓い』(光栄1988) など多数。また『ストリートファイターシリーズ』(カプコン1987～2018) には春麗や元等の中国人キャラが登場する。
  - 11 手品師でタレントのゼンジー北京、藤村有弘やタモリの中国語物まね等。
  - 12 Venuti, Lawrence. “*The Scandals of Translation: Towards an Ethics of Difference*” (1998)
  - 13 アントワース・ベルマン 藤田省一翻訳『翻訳の倫理学』23-24頁

に関する論文は2018年6月の時点で一七三篇ヒットする（博士論文三篇、修士論文一六六篇、学士論文一篇）。博士論文三篇<sup>14</sup>は芥川と中国との関係について述べたものである。さらにCNKI（中国学術文献オンラインサービス）で「芥川龍之介」をキーワードとして哲学生人文学のジャンルに収録された文献を検索すると七九六篇がヒットする。

このうち、芥川が一九二一年三月から七月までの四ヶ月間、大阪毎日新聞社の海外視察員として中国を訪れて各地を訪問して一九二五年に発表した『支那遊記』は特に中国人研究者の関心を集めている。内容をざっと見ると、幼いころから漢詩漢文に親しみ、中国に憧憬を抱いていた芥川が実際に訪れた中国（とくに上海・江南地方）で現実の社会を目の当たりにして幻滅したことに対する興味が執筆の動機となっているものが多い。このほか、芥川作品にみられる中国文学の影響（伝奇小説にヒントを得て書かれた翻案小説の分析）について論じたものも少なくないが、主に原典と翻案との比較研究（翻案のもととなった作品を探し出す作業、または小説の主題やプロットの相違など）、あるいは芥川の「中国趣味」がいかに養われたかを論じたものなどが大半を占める。

日本で出版された中国人研究者による芥川龍之介研究には、張蕾『芥川龍之介と中国—受容と変容の軌跡』（2007）、邱雅芬『芥川龍之介の中国—神話と現実』（2010）があり、いずれも博士論文を増補改訂したものである。これらの多くは中国文学、特に芥川による伝奇小説の翻案に着目し、物語の展開や描写および思想が中国語原典と比較していかなる差異があるかを分析している。

中国文学の日本文学への影響については、李銘敬編『日本文学の中の＜中国＞』がある。同書は「漢字漢文文化が日本ひいては東アジア全域の文化形成に果たした役割」（出版社による内容紹介より引用）を検討している。ここでは第一義的には中国文学が日本文学に与えた影響を、第二義的には日本文学における中国表象の用いられ方を検討しているが、いずれも古典文学を扱ったものが大半を占め、近世以降の文学に関する研究は未だ不足していると言わざるを得ない。

#### ・翻案に関する研究

文学作品の映画・演劇・漫画への改編について研究したものがほとんどであ

14 高浩「论作家芥川龙之介的中国旅行：以文本《中国游记》为中心」上海外国语2006、于天祎「芥川龙之介文本中的中国情结研究」山东大学2007、陈云哲「跨界的想象与无界的书写—谷崎润一郎、芥川龙之介作品的“中国形象”研究」吉林2010

る。これらの研究からアダプテーション（翻案）の定義を明らかにし、アダプト（適応化）することによって作品がオリジナルの枠組みから解放されてより広範に受け入れられる姿に生まれ変わることが明らかになっている。沼野充義は「日本では鎖国を解いて始まった明治時代に、西欧の文物を激しい勢いで移入し消化するプロセスの中で、外国文学をもとにした『翻案』という方法がしばしば大胆に用いられた、つまり、原作の筋や内容を借りながらも、場所を日本に移し替えたり、人名を日本人のものに変えたりして、別の作品に換骨奪胎したのである」<sup>15</sup>と述べている。

### 3. 研究の意義と方法

以上の先行研究においては、原典となる中国文学作品を、日本人が現実の中国にふれないまま哲学・文学を通じて心の中に育んできた「懐かしい異国としての中国」——「こころの中国」——に適応（adapt）させるために行われた微妙な改編に関する詳細な検討はなされていない。現実の中国とパラレルに存在するわが懐かしの中国を構成する表象とは何か、そして芥川はそれらを用いて如何に「懐かしい異国」の世界を形作ったのかを明らかにすることを本論の目的および意義とする。

研究方法は以下のとおりである。

- 1) 芥川の作品のうち、中国の文学作品を原典とした作品を抽出する。研究の目的にもとづき、芥川の中国に対する憧憬が中国社会の現実によって潰え去る以前の作品だけを選ぶ。
- 2) 各作品に現れた中国表象を抽出する。
- 3) 中国表象から我々の「こころの中国」の世界がどのように構成されているのかを検討する。

### 4. 創作的翻訳と翻案

本題に入る前に翻訳・創作的翻訳・翻案をどうとらえるかについて述べる。コセリウは翻訳されたときに保持されるべきものとして「素材関連：テキスト中で指示されている事物、意味：テキストで述べられている事それ自体、意義：テキストで述べられた事によって伝達または表現しようとしている意図」であると述べている<sup>16</sup>。本論では文学において目標言語テキスト（TT, Target

---

15 『文学とアダプテーション』 8-9頁、まえがき「アダプテーション論的転回」に向けて

Text 訳文)である翻訳作品が保持すべき起点言語テキスト (S T, Source Text 原文)の要素を以下の四点とする。

- 1) 原作にこめられた原著者のメッセージ
- 2) S Tで指示される登場人物や事物 (構成要素) および各構成要素間の関連
- 3) 原作の文体や風格
- 4) 原作の位置づけ (児童文学、時代小説、現代小説、推理小説、科学幻想小説など)

訳文は、原文に出来得る限り忠実に訳されたものからある程度自由に訳されたものまでかなり大きな幅があるが、S Tの1)と2)がT Tにおいて改編された場合は翻案と見なすことができるだろう。3)と4)を満たさない訳文に関しては「創作的翻案」の場合は許容されると考える。以下に例を挙げて説明する。

S T 「勸酒」<sup>17</sup>

勸君金屈卮 満酌不須辭 花發多風雨 人生足別離

T T 1 書き下し文 「酒を勧む」

君に勧む金屈卮 満酌 辭するを須もちいざ  
花ひら發けば風雨多し 人生別離足る

T T 2 現代日本語訳

さあ私の酒を飲んでくれ。杯いっぱい注いだこの酒を。遠慮は無しだ。花が咲けばたちまち風雨に吹き散らされる。人生どっちを向いても別ればかりだ。

T T 3 翻訳 (1)<sup>18</sup>

コノサカズキラ 受ケテクレ ドウゾナミナミ ツガシテオクレ  
ハナニアラシノ タトエモアルゾ 「サヨナラ」ダケガ 人生ダ

T T 4 翻訳 (2)<sup>19</sup>

さらばあけましょ此盃で、てふと御請よ御辭儀は無用、  
花か咲ても雨風にちる、人の別れもこのころ

16 コセリウ『コセリウ言語学選集 人間の学としての言語学』(三修社 1983年)「翻訳論における誤った設問と正しい設問」

17 唐、于武陵の五言絶句

18 井伏鱒二『厄除け詩集』1937年

19 中島(潜魚庵)魚坊(1725-1793)『唐詩選五絶白挽歌』出版年不詳

以上のTT2はSTの1)と2)を保持するのみであるが、TT3とTT4は五言絶句のSTを七五調や七七調民謡(白挽歌)の形式に翻訳して文体を保持した試みであるため、「創作的」と見なされるが、実はよりSTに忠実なTTであるともいえる。次に、漢詩を口語体の散文に移し替える創作的翻訳の試みとして、以下に白楽天の「賣炭翁」をあげる。

ST 賣炭翁 白楽天

賣炭翁、伐薪燒炭南山中。滿面塵灰煙火色、兩鬢蒼蒼十指黑。

賣炭得錢何所營、身上衣裳口中食。

TT1 書き下し文 炭を売る翁

薪を伐ち炭を焼く南山の中。滿面塵灰煙火の色、兩鬢蒼蒼十指黒し。

炭を売り錢を得て何の営む所ぞ、身上の衣裳口中の食。

TT2 創作的翻訳「炭を売る翁」<sup>20</sup>

炭うりのおぢいさんがあつて終南山の中で薪を斬つたり炭を焼いたりする。おぢいさんは顔ぢう塵や灰をあびす、ほけた色をして、左右のびんの毛はごましほで十本の手の指はまつくろだ。ぢいさんは炭をうり錢を得てそれで何をするのかといふに、それで身につける衣裳をかひ、口でたべる食物をもとめるのだ。

以上の翻訳例からわかるように、原作に含まれる範囲を出ないかぎり、翻訳者の自由な工夫はかなりの程度まで許容される。一方、翻案作品については一般的に翻訳か剽窃(盗作)かという角度から話題にされやすいが、原作を利用する方法や改作者の創造性によって判断が分かれるところであろう。前述した1)~4)を保持して翻訳した他人の作品を無断で自分の物として発表すれば剽窃(盗作)となるが、原作にヒントを得て創作された作品において、原作が読者に訴えるメッセージとは別のメッセージを読者に向けて発信し、さらに原作にない登場人物や事物を追加したり原作に存在したものを省略したり、物語の順序を換骨奪胎するなどの、翻案の書き手の独自性を発揮した大幅な改編が見られる場合は翻案ととらえることができる。中国では清朝末期から西欧の文学作品を自国の内容に置き換えた翻案作品が多く作られたが、そのうちの多くは現代の我々の目から見れば剽窃(盗作)と言わざるを得ないものが多い。

20 鈴木虎雄『白楽天詩解』弘文堂 1954年

日本では、江戸時代に中国の小説を材料にした翻案作品が多く作られた。上田秋成の『雨月物語』にも翻案作品がある。落語では三遊亭圓朝のレパートリーとして知られる『牡丹灯籠』が明代の『剪灯新話』からの翻案であるのもその一例である。明治になって、欧米の作品が日本に取り入れられるとき、日本の文物に置き換えるものがあつた。黒岩涙香の『鉄仮面』『巖窟王』も翻案作品である。初期の涙香作品では人名のみを日本化し舞台設定は現地のままとされており（イギリス人刑事の名前が森だったり検事が丸部だったりする）、現在ではこの手法は全く受け継がれていないため異様な印象を与えるが、当時はこれが読みやすいとして歓迎された。地名や人名を日本化することは一般的であつたようで、中国の古典文学である『聊齋志異』の翻案作品を著した太宰治<sup>21</sup>も「以下に記すのは、かの聊齋志異の中の一編である」、「その古い物語を骨子として、二十世紀の日本の作家が、不逞の空想を案配し、かねて自己の感懐を託し以て創作也と読者にすすめても、あながち深い罪にはなるまいと考へられる」として、物語の冒頭を「むかし江戸、向島あたりに馬山才之助といふ、つまらない名前の男が住んでゐた」と書き始めている。原作<sup>22</sup>の主人公は「順天府の馬子才」となっているが、「江戸、向島」の「馬山才之助」と書き換えて日本化している。しかしその一方で太宰は「竹青——新曲聊齋志異——」<sup>23</sup>では、原作の『聊齋志異』<sup>24</sup>にある「魚客、湖南人、忘其郡邑」を「むかし湖南の何とやら郡邑に、魚容という名の貧書生がいた」と書き始め、本文中に中国趣味を色濃く残している。同様に翻案であつても日本化した作品と中国表象を前面に打ち出した作品が同じひとりの作者から生まれたことは興味深い事実である。

## 5. 芥川の中国古典文学に取材した作品

芥川龍之介は「愛読書の印象」<sup>25</sup>という文章で「子供の時の愛読書は『西遊記』が第一である。これ等は今日でも僕の愛読書である。比喩談としてこれほどの傑作は西洋には一つもないであらうと思ふ。名高いバンヤンの『天路歷程』なども到底この『西遊記』の敵ではない。それから『水滸伝』も愛読書の

21 太宰治「清貧譚」（『太宰治全集第四巻』筑摩書房 1989年）

22 清・蒲松齡作『聊齋志異』の「黄英」

23 「太宰治全集6」ちくま文庫、筑摩書房 1989年

24 清・蒲松齡作『聊齋志異』の「竹青」

25 「愛読書の印象」——「芥川龍之介全集 第六巻」岩波書店 1996年

一つである。これも今以て愛読してゐる。一時は『水滸伝』の中の一〇八人の豪傑の名前を悉く諳記してゐたことがある。その時分でも押川春浪氏の冒険小説や何かよりもこの『水滸伝』だの『西遊記』だのと云ふ方が遙かに僕に面白かつた」と語っている。芥川が発表した中国古典文学に取材した作品とその原典となる中国文学作品は以下のとおりである。

表1 中国古典文学に取材した芥川作品

芥川作品題名	発表年 初出誌	原典
「酒虫」	1916年「新思潮」	蒲松齡『聊齋志異』卷十四「酒虫」
「仙人」	1916年「新思潮」	蒲松齡『聊齋志異』卷二「鼠戲」、 卷十四「雨錢」
「黄梁夢」	1917年「中央文学」	沈既濟『枕中記』
「英雄の器」	1917年「人文」	『通俗漢楚軍談』 <sup>26</sup> 卷十二
「首が落ちた話」	1918年「新潮」	蒲松齡『聊齋志異』卷三「諸城某甲」
「尾生の信」	1920年「中央文学」	『莊子』「盜跖篇」、『史記』「蘇秦傳」など
「杜子春」	1920年「赤い鳥」	鄭還古「杜子春伝」（『太平広記』）
「秋山図」	1921年「改造」	憚南田「記秋山図之始末」
「奇遇」	1921年「中央公論」	『剪燈新話』卷二「涓塘奇遇記」
「仙人」	1922年「サンデー毎日」	『聊齋志異』卷一「勞山道士」
「女仙」	1927年「譚海」	『女仙傳』「西河少女」

以上十一篇の翻案作品のほかに以下十四篇の中国に関連するオリジナル作品を発表している。「女体」（1917年「帝国文学」）、「南京の基督」（1920年「中央公論」）、「影」（1920年「改造」）、「奇怪な再会」（1921年「大阪毎日新聞夕刊」）、「アグニの神」（1921年「赤い鳥」）、「母」（1921年「中央公論」）、「將軍」（1922年「改造」）、「第四の夫から」（1924年「サンデー毎日」）、「桃太郎」（1924年「サンデー毎日」）、「馬の脚」（1925年「新潮」）、「侏儒の言葉」（1925年「文藝春秋」）、『支那遊記』（1925年「改造」）、「湖南の扇」（1926年「中央公論」）、「発掘」（未完）（1927年）。

26 江戸中期の読本（よみほん）。明代の「西漢通俗演義」の翻訳。15巻。7巻まで夢梅軒章峰、8巻から称好軒徽庵（きあん）訳。元禄8年（1695）刊。漢の劉邦と楚の項羽とを主人公に、その時代の史実を簡明な読み下し文で述べたもの。中国種の軍談物の先駆。

## 6. 芥川の中国関連作品にみられる中国表象

原典である中国古典文学作品と芥川の翻案作品およびオリジナル作品のうち十三作品について中国表象の抽出を行い、分類を加えた。その結果は巻末資料1のとおりである（原典「杜子春伝」と翻案「杜子春」の比較を巻末資料2として付した）。芥川の翻案作品では西欧文学の翻案に見られる「場所を日本に移し替えたり、人名を日本人のものに変えたり」（小川et al. 2017）する手法は取られていない。以下に芥川が用いた中国表象を列挙する。

**人物名：**芥川の中国関連作品には中国人名を日本人名に変更したものは見られず、原典に登場する人名をほぼそのまま採用しているが、一部には原典には登場していない実在の歴史人物や伝説中の仙人が登場することもある。たとえば『杜子春』では原典にはない鉄冠子という仙人が登場し、呂洞賓作と伝えられる漢詩を朗唱し、主人公の豪華な暮らしを「玄宗皇帝」のそれに比している。『湖南の扇』は訪中後に書かれたオリジナル作品であるが、実在の歴史人物名や中国の妓女の名前が多く見られる。

**地理と地名：**翻案において舞台設定を日本に変更したものはない。中国旅行以前の翻案作品では原典の伝奇小説にある地名をそのまま用いるほか、『杜子春』では原典の「長安」を「洛陽」と書き換え、さらに原典にはない「峨眉山、泰山」など日本人に馴染み深い中国の地名を用いている。中国旅行から帰国後の作品には具体的な地名が増え、漢口のように現地音のルビを振ってある地名もある。

**服飾：**原典では登場人物の服装や装飾品について言及することは少ないが、芥川の翻案では様々な服飾品が効果的に用いられている。特に女性の装飾品に芥川はかなり興味を抱いたようである。翻案小説にも「耳輪、簪、髪飾り、指輪」等が出てくるが、『支那遊記』中の『上海遊記』では「南国の美人」という章を設けて中国美人を生き生きと描写している。彼の筆になる中国芸者は「胸には翡翠の蝶、耳には金と真珠との耳環、手頸には金の腕時計が、いずれもきらきら光って」いたり、「薄紫の緞子の衣裳イシヤンに、水晶の耳環を下げて」いたり、「金剛石の蝶だの、大粒の真珠の首飾りだの、右の手だけに二つ嵌めた寶石入りの指環だのを見ながら、いくら新橋の芸者でも、これ程燦然と着飾ったのは、一人もあるまいと」感心したり、林黛玉を演じた俳優の梅逢春は「蘭花の黒緞子の衣裳イシヤンに、同じ鞞形の褲子クワズだった。それが耳環にも腕環にも、胸に下げた牌メダルにも、べた一面に金銀の台へ、翡翠と金剛石とを嵌めこんでいる。中でも指環の金剛石などは、雀の卵程の大きさがあった」と驚いたりしている。

芥川はまた、「支那の女の耳は、何時も春風に吹かれて来たばかりか、御丁寧にも宝石を嵌めた耳環なぞさえぶら下げている。……支那のは自然と手入れの届いた、美しい耳になったらしい。現にこの花宝玉を見ても、丁度小さい貝殻のような、世にも愛すべき耳をしている。西廂記の中の鶯鶯が、「他釵玉斜横。髻偏雲亂挽。日高猶自不明眸。暢好是懶懶。半晌擡身。幾回搔耳。一聲長歎。と云うのも、きつとこう云う耳だったのに相違ない」と述べている。

**風景・建築**：原典では自然描写はあまり見られないが、芥川の翻案では中国の深山幽谷や花の咲く美しい自然が描かれる。原典『杜子春伝』では杜子春と道士が雲台峰にある道士の家に徒歩で登るのに対し、翻案『杜子春』は仙人と一緒に竹の杖に跨り空を飛んで峨眉山の絶壁に到着する。『秋山図』は中国絵画をテーマにした小説であるため、さらに中国の美しい風景を存分に描写している。これらの描写から芥川が水墨画や漢詩に描かれた風景に憧憬を抱いていたことがわかる。建築物は典型的な中国建築のいわゆる「亭台楼阁」が描かれている。

**芸術**：芥川は中国の音楽、戯曲、絵画にも強い関心を抱いていたようだ。『秋山図』の中国絵画のほかに、音楽（胡弓、京調・西皮調<sup>27</sup>の歌）、戯曲（雜劇<sup>28</sup>、正旦<sup>29</sup>、浄<sup>30</sup>、戯を聴きに<sup>31</sup>行く）も翻案作品に登場する。芥川の中国芸術に対する造詣の深さがうかがえる。

**小道具**：服飾品と同様に中国的な事物が小説の舞台装置や小道具として効果的に使われている。『酒虫』の「竹婦人」（竹夫人）<sup>32</sup>などはいかにも中国らしい。『杜子春』では主人公が大金持ちになって贅沢な暮らしをしたときの描写に「日に四度色の変る牡丹、白孔雀、香木の車、象牙の椅子、金の杯」などがあるが、これらは原典にはなく芥川の創作である。

**飲食・風俗習慣**：飲食や庶民の暮らしについては服飾に比してさほど大きな関心が払われていないが、紙銭を焼く習慣、繁盛する都会の往来で大道芸人が披露する「刀を呑んでみせる芸」、辮髪（辮）の男と纏足（纏）の女など中国の典型的な風俗が描かれている。また、中国旅行後の作品には割合にリアリティのある支那

27 いずれも歌の曲調の名称。

28 宋代に始まる演劇の形態の名。

29 京劇でしとやかで逆境にある女性の役。

30 正浄と副浄があり地位の高い男性、文官、武将等の役。

31 中国戯曲を鑑賞することを伝統的に「聴戯（戯曲を聴く）」と言う。

32 竹で編んだ籠状の抱き枕。夏に涼をとるために抱いて寝る。

美人の描写や鳥籠などが登場するが、これは芥川の実体験によるものであろう。

**歴史・官職名・漢籍典拠**：中国の歴史に関連する事柄、また歴史上の官職名、さらに漢籍の引用などが含まれる。文学創作において美を重んじた芥川作品のなかで、やや硬い印象を受けるが、彼の漢籍の素養が直接的に表れている部分であるといえよう。

**宗教と伝説**：翻案の原典となったのが主に聊齋志異などの伝奇小説であることから道教に関連するもの、とくに仙人・道士への言及が見られる。一部に仏教・儒教に関連するものもある。

**動植物**：猛虎と白い大蛇は『杜子春』で主人公に襲いかかったもの。原典には獅子・マムシなどより多くの猛獣が群れをなして襲ってくる様子が描かれているが翻案では猛虎と大蛇はそれぞれ一匹ずつである。中国らしい風景として柳や槐の木、紅い芙蓉、高粱畑や胡麻畑がある。

**中国語**：訪中後の著作に「是了是了、這箇這箇」とルビ付きで中国語が現れる。訪中前の『仙人』では「シイラシイラ チイコチイコ 臊子大」となっている。

## 7. 芥川の描いた中華世界

以上の中国表象から構成される芥川の「中華世界」を以下に再現してみよう。

「ここは隆盛を極めた唐の都洛陽。大馬路には、形の良い耳をした纏足の中国美人、金の耳輪をした土耳其の女、木綿の白い大掛児（中国服）を着た辮髪の男たちが行き交う。庶民の楽しみは芝居や大道芸である。往来では刀を呑んで見せる天竺生まれの魔法使いが見物客を沸かせている。

街の賑わいをよそに、春の風が黄塵を舞いあげる町はずれの城門の下には科挙に失敗した若者がため息をつきながら佇んでいる。怪しい老人が近づいて声をかけ、不思議な力で彼の運命を変える。若者は進士に登り、監察御史・知制誥・起居舎人・中書令といった朝廷の要職に次々に抜擢され、栄耀栄華をほしいままにする。

大金持ちとなった彼が香木で作った車を白馬にひかせて屋敷に帰ると、屋敷の広大な庭園には国中から取り寄せた珍しい草木が植わり、孔雀が放し飼いになっている。鳥籠には緑色の鸚鵡が美しい声で囀っている。屋敷には主人の名声を慕う文人墨客が毎日のように訪れ、詩文を吟じ水墨画の鑑定に意見をたたかわせる。彼らは夕方になると主人とともに山海の珍味をつまみに金の盃で舶来の上等な酒を飲みながら、瑪瑙の簪や翡翠の耳輪をつけ繻子の靴を履いた美人に舞いを舞わせ歌を歌わせて楽しむ。

しかし富貴な生活は夢の中の出来事で、目覚めてみるとやはり元の貧乏書生のままである。傍らにはあの老人がいてニヤニヤとしている。老人は道德の高い道士で、仙術を身につけた呂洞賓仙人であった。人間界の無常を悟った若者は仙人に頼み込んで仙術の修行をすることになる。二人は竹の杖にまたがり峨眉山を目指して空へと舞い上がった。曲がりくねった松の木が生える深山幽谷の絶壁に突き出した岩の上に置き去りにされた若者を猛虎や大蛇、神将や鬼神が襲い、上空に雷鳴が轟き稲妻が光り、谷川の水が渦巻いてすべてを飲み込もうとする。

試練に打ち勝つことのできなかった若者は西王母によって人間界に戻される。今度こそ正直に人間らしく生きていくと誓う若者に、葱嶺（パミール高原）のさらに西から来た黄色い衣を着た蛮僧が安住の地を与える。紅塵の巻を離れたそこは泰山の山中に人知れず存在する桃源郷であった。清らかな水の流れる小川の岸辺には柳や槐が木陰を作り、垂糸檜の林の向こうに花の咲く一面の胡麻畑が見える。清潔な一軒家の庭先に植えられた桃と李はいままさに満開の花盛りである」。

ここに描かれた中華世界は地理・歴史・風俗にいたるまでファンタジーである。芥川は、四か月にわたる中国旅行で現実にくれたのちも、作品に用いたコンテンツの具体性が多少は増したとはいえ、やはり自らの想像の中にある中国を描き続けた。

## 8. 終わりに

必ずしも現実の中国を反映しない芥川の中華世界は、日本人の「こころの中国」の再現と言えるのではないだろうか。芥川龍之介は翻案作品を通じて「懐かしい中国」、読者の期待する中国を描き出して見せた。ここにある中国は、古代から日本人が経書・史書・漢詩・古典文学・白話小説・戯曲などを通じて「心のなかに創りあげてきた憧れの異国」である。「異質性」を強調することが即ち「受容化」につながるという逆説的な翻案の方策をここに見出すことができる。芥川が様々な中国表象を用いて「日本化しないDomestication（受容化）」という方策を用いて数々の翻案作品を創作したことによって、今日の文学やエンターテインメントに「中国物」の流れを形成するきっかけの一つにもなっただろう。第一節「はじめに」でも述べたように、仮想現実としての中国は現代にいたるまで脈々として我々の心に生き続けている。

参考文献

- 芥川龍之介『支那遊記』（大正十年発行の国会図書館蔵本による画像復刻版）君見ずや出版2014年
- 芥川龍之介『芥川龍之介全集』全八巻 ちくま文庫1986年
- アントワヌ・ベルマン 藤田省一翻訳『翻訳の倫理学』見洋書房2014年
- 岩田和男（編集）、武田美保子（編集）、武田悠一（編集）『アダプテーションとは何か』世織書房 2017年
- 王曉平「聊齋志異日本翻案の跨文化操控」山東社会科学2011年第四期 2011年
- 小川公代（編集）、村田真一（編集）、吉村和明（編集）『文学とアダプテーション——ヨーロッパの文化的変容』春風社2017年
- 邱雅芬『芥川龍之介の中国—神話と現実』花書院 2010年
- 張蕾『芥川龍之介と中国—受容と変容の軌跡』国書刊行会2007年
- 志村有弘編『芥川龍之介大事典』勉誠出版2002年
- 周江「芥川龍之介の中国趣味——『支那遊記』を中心に——」華中科学技術大学修士論文 2014年
- 周振鶴「文化史における和刻本漢籍の意義」（東西学術研究所創立60周年記念国際シンポジウム）関西大学東西学術研究所紀要 2012年4月
- 達博「芥川龍之介の文学作品与中国情結研究」内蒙古師範大学修士論文 2009年
- 李銘敬『日本文学のなかの〈中国〉』勉誠出版2016年
- 劉金宝「太宰治と中国—作品における中国的モチーフについての考察—」九州大学大学院 比較社会文化学府 博士論文 平成27年
- リンダ ハッチオン（著）、Linda Hutcheon（原著）、片渕悦久（翻訳）、鴨川啓信（翻訳）、武田雅史（翻訳）『アダプテーションの理論』見洋書房2012年

巻末資料 1 芥川の中国関係作品にみられる中国表象分類一覧

人物名

項羽（歴史人物）、呂馬通（歴史人物）、李佐（歴史人物）、王恒（歴史人物）、烏江の亭長（歴史人物）、蕭丞相（歴史人物）	英雄の器
書生	女仙
孫逸仙（歴史人物）、黄興（歴史人物）、蔡鍔（歴史人物）、宋教仁（歴史人物）、曾国藩（歴史人物）、張之洞（歴史人物）、譚永年（歴史人物）、張繼堯（歴史人物）、譚延闓（歴史人物）、黄六一、樊阿七、張湘娥、王巧雲、含芳、愛媛々、林大嬌	湖南の扇
劉大成、西域から来た蛮僧、張三、李四	酒虫
李小二	仙人
杜子春、玄宗皇帝（歴史人物）、鉄冠子（道士）、閻魔王	杜子春
盧生、道士の呂翁（呂洞賓 <sup>33</sup> ）、崔氏の女	黄梁夢
鶯鶯 <sup>34</sup> 、奇俊王家郎、王生、趙生、趙松雪、錢塘の文人瞿祐（歴史人物）	奇遇
何小二、西太后（歴史人物）	首が落ちた話
潤州の張氏、貴戚の王氏、煙客先生（王時敏）（歴史人物）、廉州先生（王鑑）（歴史人物）、元宰先生（董其昌）（歴史人物）、黄大癡（歴史人物）	秋山図
尾生	尾生の信

地理・地名

漢口（ハンカオ）、徳勝門外、張家口、錦州	馬の脚
胡同（ことう）の社宅、塗山の禹王廟、烏江	英雄の器
支那の或田舎	女仙
広東、長沙、湖南、長江、湘江、蘆林譚、岳州、嶽麓、麓山寺、愛晚亭、橘洲	湖南の扇
葱嶺の西、長山	酒虫
北支那	仙人
唐の都洛陽、峨眉山、泰山の南の麓	杜子春
邯鄲、清河、驪州	黄梁夢
長江に臨んだ古金陵の地、秦淮あたり、松江、涓塘	奇遇
遼東、清国、北京、支那	首が落ちた話
金山寺	秋山図

33 中国の五代・宋（そう）初ころの道士。純陽子（じゅんようし）と号し、呂祖（りよそ）、孚佑帝君（ふゆうていくん）ともよばれる。

34 中国、唐代の短編小説『会真記（かいしんき）』の主人公、美しく才たけた崔（さい）氏の娘鶯鶯。

## 服飾

白い大掛児	馬の脚
大掛児、耳環	湖南の扇
黄色い法衣、耳に小さな青銅の環、帛布衫、茶褐帯	酒虫
老人のかぶった紗の帽子、土耳其の女の金の耳環、玉（を集める）、錦（を縫わせる）、翡翠の蓮の花の髪飾り、瑪瑙の牡丹の花の髪飾り、金の鏡	杜子春
紫金碧甸の指環、翡翠の簪、金の耳環、水晶の双魚の扇墜	奇遇
裙子	首が落ちた話
翡翠の耳環、鼠繻子の靴、黒繻子の上衣	南京の基督

## 風景・建築

黄塵とは蒙の春風の北京へ運んで来る砂埃	馬の脚
関帝廟	酒虫
峨眉山の絶壁、曲りくねった一株の松、桃の花が一面に咲いている、森羅殿	杜子春
紅い芙蓉、酒旗を出した家、綉閣	奇遇
高粱畑、花の咲いた胡麻畑	首が落ちた話
雲煙邱壑、溪の水が委蛇と流れたところに、村落や小橋が散在している、主峯の腹にはゆうゆうとした秋の雲が蛤粉の濃淡を重ねて、山は高房山の横点を重ねた新雨を経たような翠黛、硃を点じた所々の叢林の紅葉と映発している美しさ、空靈澹蕩の古趣、水に臨んだ紅葉の村、谷を埋めている白雲の群、遠近に側立った屏風のような数峯の青、鋪輒、甌香閣、西園の書房、庁堂	秋山図
利涉橋の側の飯館	南京の基督
黄泥の洲	尾生の信

## 芸術

胡弓、京調の党馬、西皮調の汾河湾	湖南の扇
雑劇のいわゆる楔子、錦切の衣裳をつけた正旦、黒い仮面をかぶった浄	仙人
戯を聴きに行く、落梅風	奇遇
秋山図、夏山図、浮嵐図、李宮丘の山陰泛雪図、沈石田の雨夜止宿図や自寿図	秋山図

小道具

藍色の幌を張った支那馬車	馬の脚
提籃、針金細工の鳥籠	湖南の扇
朱柄の塵尾、竹婦人、白い鳥の羽で製った団扇、紫石稜	酒虫
鼓板、紙銭	仙人
白馬に飾った色糸の手綱、日に四度色の変る牡丹、白孔雀、香木の車、象牙の椅子、金の杯、竹の杖（空を飛ぶ道具）、三叉の戟	杜子春
青磁の枕	黄梁夢
花磁盞、彫花の籠、木鶴の一双、古銅瓶、碧玉の簫、四幅の金花箋、玉簫	奇遇
竜燈	首が落ちた話
紫檀の椅子机、黄金二十鎰、公孫大嬢の剣器、彝鼎、法書、牡丹、玉欄	秋山図
画舫、紫檀の椅子、青い蓮華や金の鳳凰を描き立てた立派な皿小鉢、絳紗の帷を垂れた窓、竜の彫刻のある柱、真鍮の水煙管、緞子の蒲団	南京の基督

飲食

四川料理、老酒、蝦を盛り上げた皿	湖南の扇
蘭陵の酒、桂州の竜眼肉、西洋から来た葡萄酒	杜子春
酢蟹、金華酒、酒は竹葉青、肴は鱸に蟹	奇遇
西瓜の種、燕の巣、鮫の鰭、蒸した卵、燻した鯉、豚の丸煮、海參の羹	南京の基督

風俗習慣

鴛婦	湖南の扇
棋局	酒虫
紙銭 <sup>35</sup>	仙人
天竺生れの魔法使いが刀を呑んで見せる芸	杜子春
酒家の卓子、太白を挙げる	奇遇
辮髪、纏足、剃頭店	首が落ちた話

35 道教で死者や祖先を祭るために燃やす紙で作った紙幣や貨幣

## 歴史、官職名、漢籍典拠

楚の軍、『項羽を亡すものは天だ。人力の不足ではない。その証拠には、これだけの軍勢で、必ず漢の軍を三度さんど破って見せる』、江東の健児を糾合、中原の鹿を争った	英雄の器
聊齋志異	首が落ちた話
元朝、滄桑五十載	秋山図
至順年間、吃喝嫖賭、元稹体会真詩三十韻、対句、蘇東坡の四時の詞、有美閨房秀天人謫降来	奇遇
馬政紀（ばせいき）、馬記（ばき）、元享療牛馬駝集、伯樂相馬経	馬の脚
渭南の尉、監察御史、起居舍人、知制誥、中書門下平章事、中書令、燕国公	黄梁夢
「独酌する毎に輒ち一甕を尽す」、「負郭の田三百畝半は黍を種う」、「曹孟徳か誰かが、前路に梅林ありと云つて、軍士の渴を医したと云ふ事」	酒虫
「沈黒江明妃青塚恨、耐幽夢孤雁漢宮秋」、「人生苦あり、以て楽むべし。人間死するあり、以て生くるを知る。死苦共に脱し得て甚だ、無聊なり。仙人は若かず、凡人の死苦あるに」	仙人
朝に北海に遊び、暮には蒼梧。袖裏の青蛇、胆気粗なり。三たび岳陽に入れども、人識らず。朗吟して、飛過す洞庭湖。	杜子春

## 宗教と伝説

道仏の二教、閔帝廟	酒虫
道士、呂祖、道服、山神廟	仙人
仙術の修業、不思議な仙術、鉄冠子という仙人、西王母	杜子春
鬼神、狐仙、亀玉の毀	秋山図
秦淮の孔子様の廟	南京の基督

## 動植物

爛々と眼を光らせた虎、四斗樽程の白蛇、痩せ馬、曲りくねった一株の松、桃の花が一面に咲いている	杜子春
緑色の鸚鵡、金糸線綉墩、柳や槐、垂糸檜、紅い芙蓉	奇遇
高粱畑、花の咲いた胡麻畑	首が落ちた話

## 中国語

是了是了（シイラシイラ）、這箇這箇（チイコチイコ）	湖南の扇
嚙子大（そうしだい）	仙人

## 巻末資料2 「杜子春伝」と翻案「杜子春」の比較

### 1) 舞台設定

原典：周から隋にかけて、長安（現在の西安）、初冬の日暮れ

翻案：唐代、洛陽、春の日暮れ

【考察】長安は原典にある周と隋の首都、唐代には世界最大の国際都市のひとつとなった。西都と称される長安に対して洛陽は東都と称されシルクロードの出発点・大運河の集散地として繁栄した。芥川龍之介の翻案した「杜子春」は大正九年（1920年）『赤い鳥』の初出では「唐の都長安の西の門の下に……」とある（『芥川竜之介大事典』p604、志村有弘編 勉誠出版 2002年）。同書では翌年に刊行された第五短編集『夜來の花』（新潮社）では、洛陽と改められ、以後これが通行の底本となっている、とある。芥川龍之介が単行本に収めるにあたって、歴史事実に対して洛陽と改めているのは、日本語においては洛陽のほうが馴染まれ、かつ都と密接に結びつく地名なのである。芥川龍之介は、単なる歴史事実よりも語感に内在されるフィクションの力に鋭敏であったのである。あえて、洛陽と改めたところに、たとえ童話とはいえ、芥川龍之介の反リアリズム作家の真骨頂をむしろ窺うべきであろう、と書かれている。

志村有弘2002でも指摘しているが、芥川は洛陽を「天下に並ぶもののない、繁昌を極めた都」と描写している。「紗の帽子」、「土耳其の女の金の耳輪」など国際都市を思わせる情景描写はむしろ西都の長安にふさわしいが、事実にとらわれないフィクションの自由な力を発揮していると言えよう。また、長安は日本でいえば奈良のような古都であり歴史ある帝都としての落ち着きを感じさせる。杜子春の寄る辺ない身の上と鮮やかな対比をなすためには賑やかに繁栄する洛陽に改める必要があった。

原典では杜子春が飢えと寒さで顔をゆがめている様子が描写されているが、翻案では「春の日暮れ、うらうらと霞がたなびき、細い月が白く浮かんでいる」。原典の杜子春が非常に厳しい現実に向き合っているのに対し、翻案の杜子春は心細くぼんやりとして「いっそ死んでしまったほうがまし」などと「とりとめのないことを思いめぐらしている」。物語の季節も杜子春の内心を象徴する効果がある。

時代設定については、日本の児童文学として書かれる物語では、周や隋よりも誰もが聞きなれた唐がより適切であるということだろう。

### 2) 杜子春の生い立ちや人となり

原典：若い頃から家業に精を出さず、気だけは大きく、酒を飲んで遊び回っ

ていたので親戚や友人に見放された。

翻案：元は金持の息子でしたが、今は財産を費い尽して、その日の暮しにも困る位、憐な身分になっている。

【考察】原典では杜子春が家業を顧みずに酒を飲み遊びほうけるとして彼の放蕩を指摘している。翻案では財産を使い果たして貧しくなったことを簡単に述べた後に「憐れな身分」として、杜子春の頼りなさや消極的な性格を思わせる描写となっている。

### 3) 老人との出会い、杜子春とのやりとり、金の与え方

原典：杖をついて杜子春の前にやってくる。老人が「何を嘆いているか」と問いかけ、杜子春は親戚の薄情さを訴えているうちに興奮し怒りがこみあげてくる。その後、老人は直接的に「いくらほしいのか」と聞く。杜子春が「三～五万」と具体的な金額を言うと「それでは足りない」と返し、さらに「足りない、まだ足りない、もっと」と金額を上げていき、最後に「三百万」と言う。「それでよい」と言う。値段交渉のようなやり取りの繰り返しで徐々に金額が大きくなっていく。老人は一部の金を先に渡し、翌日にペルシャ人屋敷で残りを渡す。老人は錢三百万を渡すと立ち去る。

翻案：片目の潰れた老人が「どこからやってきたか突然彼の前へ足を止めた」。老人が横柄に「何を考えているのだ」と聞くと杜子春は「眼を伏せて思わず正直な答を」する。

【考察】原典では老人はとくに変わった登場の仕方ではないが、翻案は老人の姿かたちの異様さや忽然と目の前に現れた老人の怪しさを描くことでフィクション性を高めている。原典の杜子春は親戚の薄情さに怒りを露わにする攻撃的性格だが、翻案では眼を伏せて思わず正直に答えてしまう内向的性格である。また原典は金銭の多寡について具体的な数字のやりとりが繰り返されるが、翻案ではそのようなやりとりはなく、具体的な数字も出てこない。老人は「この夕日の中に立って、お前の影が地に映ったら、その頭に当る所を夜中に掘って見るが好い。きっと車に一ぱいの黄金が埋まっている筈だ」と言い終わると姿を消す。杜子春が地面を掘ってみると「大きな車にも余る位、黄金が一山出て来た」。

原典では老人が「君子何嘆（何を嘆いているのか）」と尋ねると杜子春は「憤其親戚之疎薄也、感激之氣、発於顔色（親戚が薄情であることを憤り興奮が顔色に出た）」とある。原典の杜子春の気の強さがわかる。原典では老人が杜子春に具体的な金額で書かれた金銭を直接手渡してから立ち去っている

が、翻案では老人は黄金のありかを教えるだけで、具体的な数字を口に出さず、「大きな車にも余るくらい黄金」を杜子春自ら掘り出したことになっている。原典は現実的な描き方をしているのに対し、翻案はファンタジー性をより強く出している。

#### 4) 贅沢な暮らし

原典：肥えた馬に乗り、上等の衣服を着て、飲み仲間を集め、楽隊を呼んで、女郎屋で歌い踊らせる。大金を得たのだからまた貧しくなることはないだろうと思って贅沢な暮らしをした結果、一、二年という短い期間で大金を使い果たしてしまう。そして一人で東の市場の西門でため息をつくのはめになる。

翻案：立派な家、玄宗皇帝にも負けない贅沢な暮らし、蘭陵の酒、桂州の竜眼肉、日に四度色の変る牡丹、何羽もの白孔雀、玉を集める、錦を縫はせる、香木の車を造らせる、象牙の椅子、金の杯に西洋から来た葡萄酒、刀を呑む芸をする天竺生れの魔法使、翡翠の蓮の花や瑪瑙の牡丹の花を髪に飾った二十人の女たちが笛や琴を奏でる。

金持ちになった杜子春のところに今まで挨拶もしなかった人々が次々に遊びにくるようになり、杜子春は夜ごと彼らと酒盛りを開いたとある。しかし彼が財産を使い果たし再び貧乏になると誰からも相手にされず、「宿を貸す所か、今では椀に一杯の水も、恵んでくれるものはない」。三年目の春にとうとう一文無しになり、洛陽の西の門の下に立ってぼんやりと途方にくれる。

【考察】原典のあっさりとした書き方に比べ、翻案は中国の情趣を存分に感じさせる事物を畳み掛けるように羅列する。華やかな中国の古都を舞台にした物語であることを強調するかのようである。日本人にとって馴染みの薄い物が羅列されるが、その字面を見るだけでもいかにも絢爛豪華な雰囲気伝わってくる。

翻案に描かれた杜子春の人間関係の変化は原典には記述のない部分である。翻案は「金の切れ目が縁の切れ目」という人の薄情さを描き、後に杜子春が俗世に愛想をつかして仙人修行をするようになる布石としている。

原典では杜子春はこれだけの大金があればもう安心だと浪費に走り、あっという間に落ちぶれてため息をついている。翻案では三年目にとうとう一文無しになって途方に暮れ、ぼんやりとたたずむ。同じように贅沢三昧に暮らしても、原典の杜子春はより豪放磊落で無鉄砲、翻案の杜子春は無計画な柔弱な印象を受ける。

### 5) 杜子春は再び老人に金をもらうがまたしても資産を蕩尽する

原典：老人は一文無しになった杜子春に「再びこのような姿になったのか。不思議なことだ。私はもう一度、おまえを助けてやろう。いくらあればいいんだい」と尋ねるが大金を一、二年で使い果たした杜子春は恥ずかしくて老人に応えることができない。しかし老人は以前と同じやり方で今度は錢一千万を恵んでやる。杜子春はこれだけの大金を得たのだから今度こそしっかり暮らしを立てて大金持ちになろうと決意する。だが大金が入ると決意も忘れて以前にもましてやりたい放題に振る舞った。結局、一、二年の内に前よりもさらに貧しくなってしまった。

翻案：杜子春は「恥ずかしそうに下を向いたまま暫くは返事もしませんでした」。しかし老人は一回目とまったく同じ方法で杜子春に黄金を与える。相変わらずし放題の贅沢を始めた。全て普通の生活にもどってしまう。車いっばいの黄金も三年ばかり経つとすっかりなくなってしまった。

【考察】原典では老人が「また元通りの貧乏になるとはおかしなことだ」と意見したり、今度はいくらほしいのかと問い詰めたりしているが、翻案では老人は落ちぶれた杜子春を見ても何も言わず前と同じに金をやる。原典の老人はより現実の人間に近く、翻案では俗世を離れた存在のように感じられる。

いずれの杜子春も恥じている様子があるが、原典では恥じ入るだけでなく「再び貧乏になるまい」と決意している。原典の杜子春は放蕩者ではあるが、自分自身の将来に対する考えを持っていることがわかる。翻案では、寝る所もないのでどうしたものかと考えている等と答えており、杜子春の思慮の浅さと無計画さが現れている。

原典ではいったん金を手にすると「しっかり暮らしていこう」という決意もすぐに忘れてしまう杜子春の放蕩ぶりが描かれる。翻案では単に普通の浪費家にもどったとだけあり、ここにも彼の流されやすく主体性のなさが現れている。

最初に財産を使い果たしたときとまったく同様に、原典は一～二年で、翻案は三年で素寒貧になった。

### 6) 再び落ちぶれた杜子春が三たび老人と会う

原典：杜子春は恥ずかしさのあまり逃げ出そうとする。老人は「これでだめならもう助けようがない」と言いながら三千万を渡す。杜子春は三度も金を恵んで自分を助けてくれた老人に恩返ししようと考え、「もらったお金で世間の義理を立て、一族の身寄りのない者たちを助ける。心願が成就したら老人の言

うとおりにする」と誓う。

翻案：老人に会うと、これまでと同じように「今夜寝る所もないのでどうしようかと思っている」と答える。老人がまたも同情してこれまで通りに黄金を与えようとする。杜子春は「金はいらぬ」と断り、「人間に愛想が尽きた」と答える。それに対して、老人が「これからは貧しくとも安らかに暮らすのか」と聞くと、杜子春は「人間はみな薄情で貧乏になってみると冷たい仕打ちをする、金持ちになっても意味がない。仙術を教えてください」と老人に懇願する。老人が弟子にすることを承諾すると大喜びする。

【考察】原典の杜子春は、老人に二度までも助けてもらいながら資産を蕩尽して落ちぶれたことを恥じているが翻案では以前と同様にただ途方に暮れている様子である。また原典の杜子春は三度目も老人から金を受け取り、それを人助けのために使うことを約束するが、翻案の杜子春は黄金を受け取らず、仙人になりたいと老人に弟子入りを頼む。この場面では原典の杜子春が改心して善行を積むと老人に約束しているのに対し、翻案では人情薄い世間から逃れて安楽に暮らしたいという他力本願で考えの甘い杜子春がいる。

### 7) 修行を開始するまで

原典：杜子春は老人に誓った通り、多くの親族を扶助して生計を立ててやる。遠縁の者の婚姻や葬儀も滞りなく済ませ、恩義のある者には恩返しし、仇のある者には復讐した。すべきことを全てすませてから杜子春は老人と共に華山の雲台峰に登る。そこには仙人の住まいがあり、仙薬を練る炉が置いてあり、仙女や青龍、白虎もいる。老人は道士のいでたちに着替えて杜子春に丸薬と酒を飲ませ、杜子春を座らせて「何があっても声を発してはならない。これからお前は鬼神や猛獣に襲われ、お前の親族が苦しみを受けても全ては幻だ。心を安らかにして黙っている」と言い聞かせて立ち去る。杜子春が庭を見ると、そこにはいっぱい水を湛えた大きな甕があった。

翻案：老人は杜子春に「初めて顔を見た時、どこか物分りがよさそうだった。それほど仙人になりたいければ弟子にしてやろう」と言い、杜子春は大喜びする。老人は「仙人になれるかどうかはお前次第だ」と答える。二人はたまたま落ちていた竹の杖にまたがって空を飛び、峨眉山へ向かう。「鉄冠子」と名乗った老人は空中で高らかに漢詩を歌う。峨眉山に到着すると深山幽谷の絶壁の下に幅の広い一枚岩があり、曲がりくねった松の木が見える。鉄冠子は「西王母に会いに行くからここで待っている、魔性が現れてたぶらかそうとしても一言でも話をしたら仙人にはなれない。天地が裂けても黙っている」と言い置

いてまた竹杖にまたがって去って行った。

【考察】この場面では原典と翻案の相違が顕著である。原典では悔悛した杜子春が一族の世話役になり積極的に善行を施す活躍を見せる。まさに儒教的な「修身齊家」を体現しているかのようである。一方、翻案では、老人は相変わらず改心しない杜子春に「はじめて会った時から物分りがよさそうだった」、「仙人になりたいなら弟子にしてやる」ときわめてあっさりとして杜子春の要求を受け入れる。

杜子春と老人が移動する手段は、原典では二人そろって「四十里あまり歩いて」「華山の雲台峰に登」り、こぎれいに設えられた家に到着する。俗世を離れた場所であることを思わせる描写は「彩雲、鶴、仙葉を練る炉、仙女、青龍、白虎、黄色い冠と縫い目のない袖なしを身につけた道士のいで立ち」などである。また庭には何かを暗示するかのようには水を湛えた大きな甕がある。翻案では仙人が拾い上げた「青竹にまたがって大空に舞い上がり」「峨眉山の方角へ飛ぶ」幻想的な描写になっており、具体的な数字で距離を明示することもない。そして翻案では老人がいきなり漢詩を朗々と歌い出す。ここにも「北海、蒼梧、青蛇、岳陽、洞庭湖」の中国的アイテムが多く用いられる。そして二人が着いた場所の描写は、深山幽谷の絶壁につき出した一枚岩と曲がりくねった松の木はまさに水墨画の世界である。杜子春は静まり返った宵闇のなかにぼつねんと一人取り残され、読者に彼の心細さをより強く印象づけている。

杜子春に「言葉を発してはならない」と命じる際に、原典では丸薬と酒を飲ませて部屋の中に座らせ「尊い神、恐ろしい鬼、夜叉、猛獣、地獄が現れてお前を襲い、お前の親族が苦しみを受けるが、すべては現実ではないから安心して恐れるな」と言って立ち去るのに対し、翻案では「西王母に会いに行くからここで待っている。いろいろな魔性がたぶらかそうとしても決して声を出してはならない」とだけ言って青竹にまたがって飛んで行ってしまふ。翻案では杜子春に何が起きても（おそらく丸薬と酒による幻覚で）現実ではないから心配ないと先に告げているのに対し、翻案では「魔性がやってくるたぶらかそうとする」とだけ告げている。ここでも原典の老人（道士）が杜子春を一人前の男として扱っているのに対し、翻案の老人（仙人）は杜子春を子ども扱いして真実を告げないという相違を見て取ることができる。

### 8) 杜子春は次々に魔物に襲われる

原典：旗指物を掲げ、戈を持ち甲冑をつけた数知れない軍人が攻めてくる。代将軍が数百人の護衛兵と共に部屋に入って来て杜子春の名を問い、剣で斬り

かかり矢で射るが杜子春が何も言わないので立ち去る。次にやって来たのは猛虎、獅子、まむし、蠍などの大軍である。猛獣たちは杜子春をさんざん脅かすが、彼が平気なのを見て消え去る。続いて豪雨、雷鳴、稲妻、洪水、火の輪が杜子春を取り巻くように発生し、杜子春は洪水に飲み込まれそうになるが、きちんと座ったまま平気である。するとまた將軍が牛の頭をした獄卒や醜怪な鬼神を引き連れて戻って来て、湯の煮えたぎる大釜を杜子春の前に置き、「姓名を言わなければ心臓をえぐり出し釜茹でにする」と迫るが、杜子春は相手にしない。

翻案：空中からいきなり「そこにいるのは何者だ」「返事をしないと命はない」と怒鳴る声が響く。黙っていると一匹の虎が現れて杜子春を睨んで咆哮し、頭上の松の木が揺れたかと思うと大蛇が杜子春をめがけて降りてくる。虎と蛇に同時に襲われてこれまでかと思ったときに二匹の猛獣は霧のように消えてしまった。続いて一天俄かに掻き曇り、雷鳴、稲妻が闇を引き裂いて轟き、いきなり滂沱の風雨に襲われる。黒雲の中に真っ赤な火柱が上がって杜子春の頭に落ちてきて杜子春は思わず岩の上にひれ伏す。しかし次の瞬間には空は元通りに晴れ渡り、杜子春は冷や汗を拭って座り直す。すると次には身の丈三丈はあろうかという神将が現れ、「自分は峨眉山に天地開闢の昔から住んでいる、たった一人でここにいるとはただ者ではあるまい、何者が返事をしないと命を取るぞ」と返事を迫る。杜子春が何も言わないのを見ると、無数の神兵を呼び寄せて杜子春を殺そうとする。

【考察】原典は数えきれないほどの軍人が部屋の中に入って来て杜子春を脅しつけ、様々な猛獣の群れが襲ってくるのに対し、翻案では軍人の登場はなく、一頭の猛虎と一匹の大蛇であり、物量の違いが見られる。天変地異に関してはほぼ似通っているが、原典は洪水に呑み込まれそうになった杜子春が平然と座っているのに対し、翻案では火柱に打たれそうになり思わずひれ伏してしまう。原典の杜子春は目の前で起こっていることが幻覚であると知っているのも何事にも平然としているのに対し、翻案の杜子春は恐ろしさに耐えかねて思わずひれ伏す。性格の違いがここにも現れている。

続いて、原典ではいったん去って行った將軍が地獄の獄卒や鬼神を引き連れて戻って来てさらに姓名を問いつめ、「返事をしないと心臓をえぐり出す」と迫る。翻案ではここで初めて神将が現れ、「返事をしないと殺す」と言い、神兵の大軍を呼び寄せる。猛獣→天変地異→軍人という出現の順序によって、死の危険が徐々に高まっていく。そして原典の杜子春が平然と相手にしないのと

は異なり、翻案では杜子春は軍人が攻め寄せてくるのを見て思わず叫びそうになるが一生懸命に黙っている。

### 9) 杜子春は殺される

原典：將軍は家の庭先に杜子春の妻を連れてきて、「名を言えば妻を助けてやる」と言うが杜子春が相手にしないので、妻を鞭・弓矢・刀剣・火あぶり等の様々なやり方で苦しめる。妻は杜子春に助けを乞い「あなたの一言で助かる」「人としての情がないのか」と必死に懇願するが、杜子春はふり向いて見ようともしない。將軍はますます怒り、押し切りで妻を足先から一寸刻みに刻ませる。妻は激しく泣き叫ぶが杜子春はやはり無視する。將軍は「こやつはすでに妖術を会得している、この世には置いておけない」と言って側近の者に杜子春を切り殺させた。

翻案：神將は「強情者め、返事をしないなら約束通り命を取ってやる」と喚いて戦で一月に杜子春を突き殺し、神兵とともにどこへともなく消える。杜子春は息絶えて岩の上にあおむけに倒れた。

【考察】原典では道士の「親族が苦しめられる」という予言通り、杜子春の妻が様々な残酷な方法で責め苦しみに遭い、最後には足元から一寸刻みにされながら助けを乞うが、翻案には妻は登場しない。中国文学は往々にして暴力描写がリアルでくどいところがあるので日本の読者は辟易する可能性があるかもしれない。また、原典で杜子春が殺されるのは「すでに妖術を会得している」からであるが、翻案では「返事をしない」という理由だけで杜子春は戦で突き殺されている。この部分が書き込まれて重くなると小説としての全体的なバランスが悪くなり、後半の山場が活かせない恐れもあるだろう。

### 10) 杜子春は閻魔大王に引き渡され、地獄に落ちる

原典：杜子春の魂は獄卒に連れられて閻魔大王の前に引き出され、「雲台峰の妖民」として地獄に落とされることになる。地獄に落ちた杜子春は溶けた銅の柱に登らされ、鉄の棒でたたかれ、碓で搗かれ、碾き臼でひかれ、火の海に入れられ、釜ゆでにされ、刀の山、劍の樹に登らされるなどありとあらゆる苦しみを味わうが、道士の言葉を思い出して耐え抜いた。

翻案：杜子春の魂は体から抜け出して静かに地獄の底へ降りていく。そこには森羅殿という御殿があり、そこで閻魔大王の審問を受ける。杜子春が黙っていると鬼たちに引き立てられて地獄に落ちる。杜子春は地獄で剣に胸を貫かれ、焰に顔を焼かれ、舌を抜かれ、皮を剥がれ、鉄の杵に撞かれ、油の鍋に煮られ、毒蛇に脳味噌を吸われ、熊鷹に眼を食われ、あらゆる責め苦しみに遭わされた。鬼

たちはそれでも押し黙ったままの杜子春に呆れ、ふたたび閻魔大王のもとに引き据えて「この罪人はどうしても物を言う景色がない」と言上する。

【考察】原典では閻魔大王の裁きによって地獄に落ちるが、翻案では魂がそのまま地獄へ向かって行く。翻案はこの部分で原典にはないこの世と地獄をつなぐ道、閻魔大王のいかめしい様子や服装などを饒舌に説明する。また閻魔大王の台詞や地獄での責め苦も原典より詳細になっている。芥川がひとつの山場を地獄の情景に持ってきているのがわかる。地獄は日本人にとって仏教説話によって馴染み深い。

### 11) 責め苦を受けた後の杜子春

原典：地獄の刑罰を受け終わった杜子春を、閻魔大王は「陰の気を受けているから女に生まれ変わらせる」ことにした。杜子春は女に生まれ変わったが病弱で苦痛に満ちた日々を送ったが、声は出さないままだった。やがて絶世の美女に成長し、盧珪という進士に望まれて嫁ぐ。

翻案：閻魔大王は何としても声を発しない杜子春に業を煮やして、畜生道に落ちているかれの父母を連れてこさせる。鬼が連れて来た二匹の痩せ馬はたしかに死んだ杜子春の両親であった。閻魔大王は鬼どもに命じて二匹の馬を容赦なく鞭打ち、畜生になった父母は苦しそうに身悶え血の涙を流して息絶え絶えに階の前に倒れ伏す。

【考察】この場面の展開は原典と翻案で大きく異なる。原典では杜子春が女に生まれ変わる。中国では伝統的に広く根付いている輪廻転生思想が伝奇・志怪小説に現れるが、日本ではあまり見られない。翻案では杜子春はまだ地獄を抜け出せず、父母が自分の身代りとなって鞭打たれるのを目の前で見せられている。

### 12) 杜子春は老人との約束を守り切れず声を出してしまう

原典：数年間は夫婦の愛情が深く、息子も生まれた。しかし、息子が二歳のころ、いろいろと気を引いても決して答えようとしない妻に夫は「自分を軽蔑しているのか、妻に軽蔑されるなら息子などいらぬ」と怒りを爆発させて、息子の両足を持って石にたたきつけて殺してしまった。杜子春はふと道士との約束をわすれ、息子への愛の気持ちが生じて思わず「ああ」と声を上げてしまった。

翻案：杜子春は必死になって仙人との約束を守ろうと目をつぶっていたが、ふとかすかな声が聞こえてきた。それは「心配をおしでない。私たちはどうなっても、お前さえ合わせになれるのなら、それより結構なことはないのだから

ね。大王が何と仰《おっしゃ》っても、言いたくないことは黙っておいで」という母親の声であった。思わず目を開けると一匹の馬が彼の顔を悲しそうに見ている。金がなくなれば寄り付かなくなる薄情な世間の人々を比べて何と有難く健気な親の情けであるかと心を揺さぶられた杜子春は思わず半死の馬の首を抱いて「おっかさん」と一声叫ぶ。

【考察】杜子春が声を出したきっかけとなったのは、原典と翻案のいずれも血を分けた家族への情である。しかし原典では母の息子に対する愛を、翻案では息子の母に対する孝をその原因としている。ひとつには、翻案は原典と異なり杜子春が女に生まれ変わっていないので、血を分けた子供という設定が使えなかったという理由もあるが、母に対する息子の思いを用いたほうが読者の共感を得やすいということもあるだろう。

### 13) 杜子春はもとの場所に戻ってくる

原典：「ああ」という声はまだ終わらないうちに杜子春はもとの道士の家に戻って同じ場所に座っていた。紫の炎が家の四方からとり囲み大火事になっていた。道士は「貧乏書生め、わしをこんな目にあわせおって」とため息をついて杜子春を庭の水瓶の中に投げ込んだ。そして「喜び、怒り、哀しみ、恐れ、憎しみ、欲情については、すべて忘れ去った。まだ忘れていないものは愛だけである。もしも先ほどおまえが『ああ』という声を出さなかったならば、私の仙薬は完成していて、おまえも同様に仙人になっていたのだ」と残念がった。そして杜子春に遠くの道を指さして帰るように言った。杜子春は家に帰ってからも道士との約束を果たせなかったことを恥じ、後に自分の過ちを謝ろうと雲台峰に再び登ったが人の通れる道はなく、無念の思いに嘆き悲しんで帰った。

翻案：杜子春は以前と同じ洛陽の西の門の下に夕日を浴びて立っている。全てが峨眉山に行く前と変わらない。老人は微笑しながら「俺の弟子になっても仙人にはなれまい」と言う。杜子春は「なれませんが、なれなかったこともかえって嬉しい気がする」と答えて老人の手を握る。「いくら仙人になれても鞭を受けている父母を見て黙っていることはできなかった」と言う杜子春に老人は急に厳かな顔になってこう答える。「もしお前が黙っていたら即座にお前の命を絶ってしまおうと思っていた。お前はもう仙人になりたいとは思わないだろうし、大金持になることにもとくに愛想がついた筈だ」。老人にこれからは何になったらいいと思うかと問われた杜子春は晴れ晴れとした調子で「何になっても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです」と答えた。老人は「今日限り、二度とお前には会わない」と言って歩き出したが、ふと足を止めて杜

子春の方を振り返り、「泰山の南の麓に一軒の家を持っている。その家を畑ごとお前にやるから、早速行って住まうが好い。今頃は丁度家のまわりに、桃の花が一面に咲いているだろう」と、さも愉快そうにつけ加えた。

【考察】小説の最後が大きく相違している。原典では声を出して仙人になり損ねた杜子春を道士が「自分の仙薬もお前のせいで完成できなかった」と叱りつけ、人としての愛を忘れられなかったことを責める。杜子春も道士との約束を守り抜けなかったことを恥じて、再び山に登ってまで謝罪しようとする。しかし翻案では杜子春が「仙人になれなかったことがむしろ嬉しい、これからは正直な暮らしをする」と晴れ晴れとした顔で言い、老人もその返答に満足し、家と畑を与えようと言う。肉親への情よりも道士との約束を重んじるかのような原典の終わり方はおそらく日本の読者にとって意外な結末かもしれない。しかし翻案では「黙っていたらお前を即座に殺してしまおうと思っていた」と言い、貧しくとも人間らしく生きていくことを善とする。老人が杜子春に与えた「桃の花の咲く家」は陶淵明の「桃花源記」<sup>36</sup>を思い起こさせる風景である。

巻末資料3 『杜子春伝』・『杜子春』、『酒虫記』、『枕中記』・『黄梁夢』の原文・和訳・芥川の翻案比較（以下のQRコードから閲覧可）



36 中国の伝奇小説。東晋の陶淵明作。桃の花の林に迷い込んだ武陵（ぶりよう）の漁師が、外の世界と隔絶した平和で豊かな村を見つけるが、もう一度行こうとして果たせなかった物語。「桃源郷」の語のもととなった。